

仙波希望、『ありふれた〈平和都市〉の解体 広島をめぐる空間論的探求』以文社、2024年

後山 剛毅

先端総合学術研究科研究生

「はじめて私がコンクリートにぶつかったのは
広島の記念陳列館であった。私たちは、この原爆の
廃墟のなかから、力強くたくましく立上るような、
何かをつくりたいと希っていた¹⁾」。平和記念公園
の設計を担当した丹下健三（1913 - 2005）は、
1958年に『建築文化』に発表した論考のなかでそ
う述べている。丹下が広島で構想した都市の軸線は
「平和の軸線」と呼ばれ、その軸線は丹下の弟子に
よって拡張された。そしてそのエピソードは、映画
『ドライブ・マイ・カー』の世界的な評価とともに、
「ありふれた」〈平和都市〉という虚像として世界に
広まった。本書の目的は、「まさにありふれたもの
としてあり、そして語られる、この〈平和都市〉の
解体」とされる。

本書は、仙波希望が2019年に東京外国語大学大
学院に提出した博士論文『〈平和都市〉広島をめぐ
る空間論的研究』をもとに、大幅に改稿をおこない、
さらに博論後に発表した原稿を加えたものである。
冒頭に付したように、本書が目指すのは、「ありふ
れた」〈平和都市〉という像の解体である。しかし
ながら、そこで注意すべきは、1980年代にすでに
井上章一が指摘し²⁾、その後2000年代以降の集合
的記憶論を念頭に置いた「広島」研究のなかで批判
的に位置づけられた「軍都」の歴史を抑圧する〈平
和都市〉の実像もまた、本書が解体し、再検討する
べきとする〈平和都市〉の姿ということである³⁾。
本書はふたつの「ありふれた」〈平和都市〉の解体
のために捧げられている。ひとつは、「軍都」広島

の歴史を塗り替え、抑圧し、隠蔽しようとする〈平
和都市〉の姿であり、もうひとつは、そうした〈平
和都市〉の姿を批判するためにかえって「軍都」か
ら〈平和都市〉へという変遷を強調する学術研究が
描き出す〈平和都市〉の姿である。

本書は、理論編と事例編の二部で構成されている。
第一部の理論編として、これまでの広島研究が参照
され、2000年以降にひとつの潮流をなしている集
合的記憶論の視点に立つ研究のなかで、〈平和都市〉
の形成過程が二分法的視点に立って記述されている
傾向が指摘される。そして、そうした二分法を乗り
越える術として、「都市研究 (Urban Research)」
の理論的成果が概観される。具体的には、ポストコ
ロニアル都市理論、ブリュノ・ラトゥールのアク
ターネットワーク理論（以下 ANT）、アンリ・ル
フェーブルの「空間の生産」論が参照され、本書の
議論に必要な理論的なフレームワークが提示される。
そのうえで著者が採用するのは、ルフェーブルの三
元弁証法（「空間的实践」、「空間の表象」と「表象
の空間」が絶えず循環する空間生産のプロセス）を
基軸に、無数のネットワークが紡ぎだす〈平和都
市〉を、未決定の「都市的なもの」としての都市
生成のダイナミズムを、「進行形の——そして動名
詞の——過程⁴⁾」として捉えるという方法である。

第二部の事例編では、第一部で提示した理論的な
フレームワークをもとに、戦前／戦後実証的な歴史
研究を通じて、「広島」という都市の空間的変遷の
ダイナミズムがありありと描かれる。具体的には、

第三章では戦後当初の〈平和都市〉言説や理念をめぐるポリティクスがメディア・イベントを対象に検討され、第四章では戦前のふたつの博覧会と「広島都市美運動」が検討される。第五章では相生通りに注目して、その生成と拡大、消滅までの過程が〈平和都市〉との関連性ととも明らかにされる。第六章では、〈平和都市〉を象徴する建造物でありながら、同様のものが複数存在し、それぞれの意味が異なる「平和塔」を分析することで、変動する都市の意味を揺さぶる「塔」の存在が明らかにされる。

本書の特徴ともいえるのが、理論編と事例編のあと、結論の前に付された「批判と応答」という著者自身が「アプローチとしてはいささか突飛に映るかもしれない⁵⁾」というパートである。そこでは本書が成立する過程で受け取ってきた「批判」にたいする著者による「応答」が試みられている。そこで著者は、本書によって生み出され、本書に向けて差し出された批判に対して、本書の位置づけである広島研究の王道とされた二分法や〈平和都市〉を一度留保する理由を本書の限界を踏まえながら丁寧に応答している。

さて、このような本書の最大の意義は、著者によれば、「ややもすれば「特殊」な研究領域と見なされてきた観のある広島研究を、より広範な都市研究の理論的領野へと接続したこと⁶⁾」とされる。たしかにこれまで、とくに1990年代以降の集合的記憶論は事例研究を中心に、膨大な記述を蓄積してきた。他方で、それらの研究の蓄積の結果、問いが先細りし、「ガラパゴス」化してきたともいえる。そうした研究状況にたいして本書は、理論編においてこれまでの広島研究の課題を抽象化したうえで、そこから見いだされる理論的な課題を解きほぐし、その視点を事例研究という実証的な歴史記述の背後に流し込んでいる。

本書の白眉は、第二部の事例研究、なかでもとりわけ第四章で記述される戦前と戦後の広島という都市の連続性だろう。著者の以前にも、井上章一による平和公園の空間的な分析が存在し、そこではどちらも丹下健三によって策定された「大東亜建設記念造営計画」という富士山麓を想定した建造物の構造

と「平和記念公園」の構造の一致が指摘され、「大東亜建設記念」と「平和記念」の連続性が明らかにされた⁷⁾。井上による分析は、戦中の富士山麓を想定した計画と戦後の広島における計画の連続性を示した。それに対して本書は、広島という空間に内在した形で、戦前と戦後の広島／広島市を架橋する事実を提示する。具体的には、1929年に開催された昭和産業博覧会と「大広島」構想の関係、1932年の時局博覧会、1935年の広島都市美運動とその戦後への展開が分析される。そして「大広島」構想が、「都市に固有の「場所の神話」を示すものではなく、むしろ陳腐なまでに普遍的な都市発展志向を提示したものでしかな⁸⁾」く、それを喧伝する場こそが昭和博であったことが明かされる。つぎに、昭和博の宣伝施策に携わった小野勝に注目し、彼を中心に昭和博の三年後に開催された時局博、とくに展覧会の展示物の比較を通じて同博覧会が「過剰なまでに詰め込まれた「戦地」性のもと、「軍都」の都市理念を、いま・ここに再現させる企図をもったメディア・イベント」であったことを明らかにし、昭和博からの変遷を、「その指向性、つまりこれからの理想とする都市像をより純化したかたちで提示した」と分析する。最後に1935年以降に展開された広島都市美運動における「東洋のヴェニス」という言説が検討される。著者は、この「東洋のヴェニス」が「戦前と戦後をまたぐかたちで展開され、〈平和都市〉化への根拠の一部として位置づけられた⁹⁾」と戦前の都市美運動で希求された都市の理想像に戦後の〈平和都市〉化の接点を求める。以上のように第四章において示されたのは、本書の根幹ともなるような戦後の都市に流れ込む戦前の都市像の姿である。

このように本書は、丁寧に積み上げられた事例検証によって、ポストコロニアル都市理論、ANT、三元弁証法といった理論的フレームワークの視点の有用性を示し、先行する都市研究と広島研究の静態的な成果に対して再考を迫っている。こうした視点によって発見されたこれまでの事例研究が取りこぼしてきた多くの事例は、著者によって「副次的産物」と位置づけられるが、都市研究の理論研究と広島研究の接合によって明るみにでたこれらの事例こ

そ、本書の主たる意義ではないだろうか。そうした事例を積み重ねているからこそ、読者としてどこかで単純な比較を期待してしまう。それは「批判と応答」のなかでフィールドが広島に絞られていることへの批判に重ねられる。著者は、経済地理学者のジェイミー・ペックの言葉を引きながら、容易な比較を試みないことを掲げている。このことを念頭におきながらも少しばかり比較研究の可能性を考えてみたい。

近年の都市社会学の研究の潮流の一つに、ある空間を流動的に行き来する人々に焦点を当てる研究がある¹⁰⁾。そうした研究の潮流を踏まえるならば、戦後の広島市の復興に際して、近隣市町村からの人々の流入を考慮にいれ、近隣の市町村の復興との関係のなかで広島の戦後復興が捉え直される必要もあるのではないだろうか。たとえば、戦前から戦時中にかけて陸軍都であった広島にたいし海軍都であった呉の戦後復興との関係である¹¹⁾「大」都市名というスローガンは、一九二〇年代の都市政策における一つのトレンドであった¹²⁾と著者は指摘する。それは広島市に隣接する呉市も同様だった。批評家の東琢磨は、「旧軍都＝国際平和都市・広島は、西の岩国、東の呉に挟まれている。〔中略〕旧軍都・広島は、西に東に、米軍や自衛隊の諸施設を抱えている、あやうく小さな平和都市なのである¹³⁾」と述べる。現在の呉市歌には、「大和島根の瀬戸の海に／久遠の光仰ぐ国／あゝ新潮の高鳴りに／天翔り行く鳳や／呉市／呉市／大呉市¹⁴⁾」という歌詞がある。この市歌は、1928年に制定されたまさに「大」都市名を喧伝するものである。戦後になり海軍都であった呉市は、広島市の「平和記念都市建設法」と同様の特別都市建設法である「旧軍港市転換法」の対象となり、「平和産業港湾都市」へと生まれ変わることが目指された。そうしたなかで、1952年に「伸びゆく呉」を象徴する新市歌が公募された¹⁵⁾。しかしながら、市制五〇周年記念呉市歌として発表された新市歌は、すでに失われ、戦前に謳われた旧市歌がいまも謳い継がれている。東琢磨は、海上自衛隊や海上保安庁を喧伝する2000年代の呉発の映画群を『海猿』から『大和』への流

れは、「陸」の靖国とはまた違った、「海」のロマンと重なる日本のナショナリズムへの現代的回帰¹⁶⁾と批評する。こうした戦後の広島都市復興、あるいは「平和記念都市」化の過程と並行して、その隣で戦前の軍都的な都市へと回帰していく呉市のあり様は対照的である。こうした対照的な都市イメージを保持しながらも、それぞれの都市の復興に携わった人々、あるいは戦後の都市空間を行きた人々は、その境界を跨ぎ続けてきたはずだ。本書がきりひらいた道筋は、個別の事例を積み重ねることで都市の構造を紐解き、新しい都市に向かって結び続ける営みであるといえる。そうであるからこそ、既存の「広島」研究を超えたところで近隣の都市との関係のなかで生まれた戦後広島都市の歴史を期待せずにはいられない。

【注】

- 1) 丹下健三「無限のエネルギー：コンクリート」、豊川斎赫編『丹下健三建築論集』、岩波書店、2021年、107頁。なお同論考は、『建築文化』1958年2月号に初出のものである。
- 2) 井上章一『アート・キッチュ・ジャパネスク 大東亜のポストモダン』青土社、1987年。
- 3) こうした戦後の広島市民を抑圧する平和都市像を描いたものに、岸佑「『広島』と『ヒロシマ』の間——平和記念公園の史的研究」『ICU比較文化』41号、2009年、243～274頁が挙げられる。
- 4) 仙波希望『ありふれた〈平和都市〉の解体 広島をめぐる空間論的探求』以文社、2024年、112頁。
- 5) 前掲、仙波、343頁。
- 6) 前掲、仙波、364頁。
- 7) 前掲、井上、285～294頁。
- 8) 前掲、仙波、186頁。
- 9) 前掲、仙波、226頁。
- 10) あるとし空間に出入りする人々の流動性を踏まえた研究として、例えば、武岡暢著『生き延びる都市——新宿歌舞伎町の社会学』新曜社、2017年などが挙げられる。
- 11) 評者もふたつの都市の戦後復興の過程における人々の流動性について明るいわけではないが、それらの動向は戦後日本映画を代表する作品の一つでもある「仁義なき戦い」シリーズにおけるふたつの都市のヤクザ組織の混淆的な状況からもうかがえる。
- 12) 前掲、仙波、179頁。
- 13) 東琢磨『ヒロシマ独立論』青土社、2007年、42～43頁。
- 14) ここで紹介したのは呉市歌の歌詞一番だが、二・三番も一番と同様に「呉市／呉市／大呉市」というフレーズで締められる。
- 15) 「昭和二七年一〇月一日、呉市は市制五〇周年をむかえた。これを記念して「伸びゆく呉を象徴」する呉市歌を募集し

た。応募作品一二二編の中から豊田郡豊田村の重園賢雄の歌詞が一等に入選した。その後、この歌詞に宮原禎次が作曲、「呉市制五〇周年記念呉市歌」として発表された。なお、戦前の三年一二月二七日に告示された「呉市歌」については、二八年に時代の変化に対応した歌詞に変えたらという意見もだされたが、結局、「このままでいいの声が多く、これまでどおりということになったという」（呉市史編纂委員会『呉市史 第七巻』呉市役所、1993年、571～572頁。）

16) 前掲、東、42頁。

引用文献

井上章一『アート・キッチュ・ジャパネスク 大東亜のポストモダン』青土社、1987年。

呉市史編纂委員会『呉市史 第七巻』呉市役所、1993年。

仙波希望『ありふれた〈平和都市〉の解体 広島をめぐる空間論的探求』以文社、2024年。

丹下健三『無限のエネルギー：コンクリート』、豊川斎赫編『丹下健三建築論集』、岩波書店、2021年、101～116頁。

東琢磨、『ヒロシマ独立論』青土社、2007年。